

## COLUMN

HOME &gt; COLUMN INDEX &gt; GUEST COLUMN



contact us

sarah

FIVE by FIVE 注目の新譜



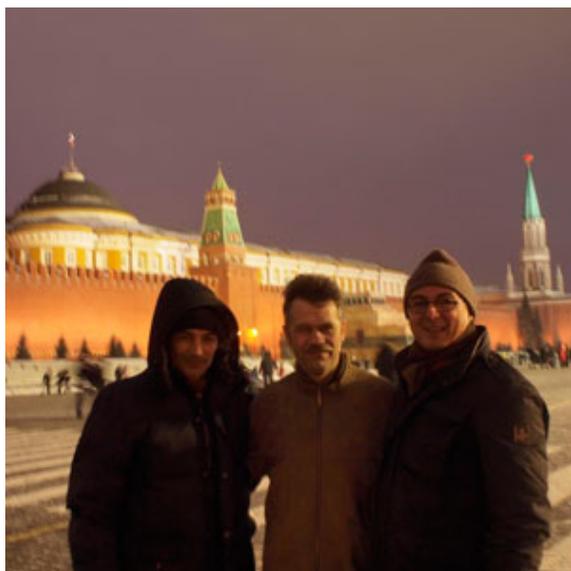
NEW 5.06 '13

FIVE by FIVE

#983 藤井郷子 Satoko Fujii New Trio /『Spring Storm』(Libra Records=ボンバ) 悠 雅彦 / #984 『ドヴォルザーク & ブルッフ: ヴァイオリン協奏曲集/ユリア・フィッシャー』(デッカ=ユニバーサル) 大木正純 / #985 『ギラ・ジルカ & 矢幅歩 SOLO-DUO/Breathing...』(Jump World=Boundee) 望月由美 / #986 『Michael Reis/Hidden Meaning』(Double Moon) 伏谷佳代 / #987 『奥平真吾 THE FORCE /Live At PIT INN~I didn't know what time it was』(ピットインミュージック) 望月由美 / #988 『Alex Cline /For People in Sorrow』(Cryptogramophone) 稲岡邦弥 / #989 『キース・ジャレット | ゲイリー・ピーコック | ジャック・ディジョネット / サムホエア』(ECM=ユニバーサル) 稲岡邦弥

COLUMN :

巻頭エッセイ: 丘山万里子: カデンツァ Vol.58 「京都での朝の勤行」 丘山万里子 / 連載フォト・エッセイ: 音の見える風景 Chapter27 「竹内直」 望月由美 / 撮っておきの音楽家たち #61 デュオ・アマル (ピアノ・デュオ) / #62 「ビエタリ・インキネン」 (指揮者) 林 喜代種 / カンザス・シティの人と音楽 #36 (EXTRA) 「東洋と西洋のミックスした国マカオで出会った音楽」 竹村洋子 / ニセコロッシ・コンサート・ツアー 19 (Niseko-Rossy Pi-Pikoe) / 及川公生の聴きどころチェック #162 『小山



## GUEST COLUMN

## 特別寄稿

## From Russia with Jazz

Francois Carrier (フランソワ・キャリエール)

その間、アレクセイが僕らにあてがわれていたひどいホテルをキャンセルして代わりにホテルを探してくれていた。その晩、つまり、12月20日の夜、僕らはJFCジャズ・クラブで演奏した。幸いにもアレクセイがその夜のコンサートをうまく録音してくれた。翌火曜日、僕らは2時間ほどサント・ペテルブルグの街を散策してから、ESG-21へ出掛けた。アヴァンガルドと即興演奏向けの本当に小さなクラブだった。

サント・ペテルブルグの最終日はヴァレラが街を案内してくれた。ありがとう、ヴァレラ! 駆け足の1日が終わって、アレクセイとシェタの家で皆で食卓を囲んだ。シェタ、暖かいもてなしをありがとう。

モントリオールへ戻って演奏を聴き直し、この演奏を公開することを皆で決めた。リリースしたのは3回のコンサートのすべて。モスクワで演奏した1部を『Inner Spire』として2011年3月にレオ・レコードから。次いで、2011年の12月には『All Out』を

Intense and inspiring! (情熱とインスピレーション!)

ロシアを端的に言い表す時に僕がいつも使う2つの言葉である。

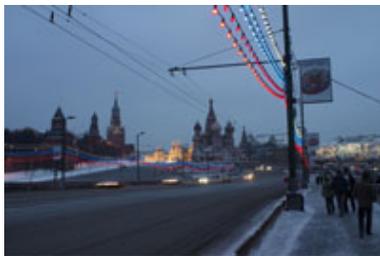
この東方へのコンサート・シリーズは大分前に企画したものだが、いつものことながら、実現までには忍耐が必要だった。レオ・レコードのオーナーでロシア出身のレオ・フェイゲンにリクエストを出したのは2010年9月だったのだが、それが突然実現したのだ。3日後にはサント・ペテルブルグのピアニスト、アレクセイ・ラビンからも、モスクワとサント・ペテルブルグで3回のコンサートを開催すると伝えてきた。まさにシンクロニシティ (共時性) というべき事態だった。

12月18日、モスクワ入りした。僕の第一印象はデジャブ (既視感) に近いもの。天候や自然の環境が僕の

地元モントリオールとまったく同じだったのだ。何年も続いた抑圧から来るものと思われる重苦しさや厳しさは感じたものの、この街がすぐ好きになった。現地では生きることが容易（たやす）いことではなかっただろうし。

僕らは音楽を演奏するためにロシアに来たんだ。だから、演奏をしようぜ。ピアニストのアレクセイ・ラピンがモスクワの中心地にある僕らの居所（BB、いわゆるBed & Breakfastというやつ）にやってきた。僕も同行のミシェルもアレクセイとは初対面だ。この居所から最初のギグの会場、DOM文化センターへは歩いて行ける距離。ロシアに出発する前、僕らは初めての顔合わせだけど、きつとお互い交感し合えると思っていた。午後、数曲インプロヴィゼーションを録音してから、DOMから歩いて赤の広場へ出掛けた。その日は、フリーのメロディアスな即興音楽（free melodic improv music）を演奏した。事前には知らされていなかったのだが、コンサートが終わってその夜の夜行列車でサンクト・ペテルブルグへ向かうことになっていたのだ。汽車の旅は10時間に及んだが、その間眠れたのは7分もなかったと思う。モスクワ滞在中はアレクセイの義理の兄弟であるヴァレラ・ゴザロが何かと世話を焼いてくれて、僕らは、今、この美しい都市、サンクト・ペテルブルグに居るといわけだ。20分ほど歩いてアレクセイの自宅へ到着し、シエタが用意してくれた暖かい朝食をいただいた。

♪ モスクワにて



FMRレコードから、さらに2012年の1月にはレオ・レコードから『In Motion』をそれぞれリリースした。これらの3作を通じてロシアのスピリットを感じとってもらえると思う。生きざま、発見、ユーモア、刺激、道、旅立ち、地図、静穏、サンクト・ペテルブルグ、物語、厳しさ、団結、テクニック、激しさ、モントリオール、共生、犠牲、天空、タイミング、旅路、静謐、危急、これらのすべての要素。

2011年の12月6日、ロンドンのヴォルテックスで、『In Motion』と『All Out』のリリースを祝うイベントがあり、ベーシストのジョン・エドワーズとピアニストのステイヴ・ベレスフォードがゲスト参加してくれた。どんな演奏だったかって？それは、今年リリースされる『Overground to the Vortex』を聴いてのお楽しみ。

やるべきことはたくさんあるが地上での生はとても短い。だから、聖人でもない限り、生きている以上つねに前を向いて創造的であることがとても重要になる。

真の友達であるOlivier Chevillot, Édith Fortier, Jacques Fortier, Valera Godzhalo, Michel Lambert, Alexey Lapin、そしてこの地球に住むすべての生き生けるものに心からの感謝を。（2012年3月14日）

太郎／ビート・ザ・ブルース』(M&I/ポニーキャニオン)／#163『塩谷 哲／アロー・オブ・タイム』（ビクターエンタテインメント）

#### CONCERT/LIVE REPORT :

#512「東京フィルハーモニー交響楽団 第76回東京オペラシティ定期シリーズ／ミハイル・ブレトニョフ／小川典子」伏谷佳代／#513「マリア・ジョアン・ペリス&アントニオ・メネセス デュオ・リサイタル」伏谷佳代／#514「エスペランサ・スポルディング〜ラジオ・ミュージック・ソサイエティ」神野秀雄／#515「黒沼ユリ子 ゴールデン・アニバーサリー コンサート」西松朝男／#516 エグベルト・ジスモンチ & アレシャンドレ・ジスモンチ「ギターデュオ、ピアノソロ」神野秀雄／#517「航海プレゼンツKarl2000日本デビュー・ツアー」伏谷佳代／#518「ブリュッヘン・プロジェクト I・II・III／フランス・ブリュッヘン&18世紀オーケストラ」伏谷佳代／#519「ブリュッヘン・プロジェクト〜18世紀オーケストラ&新日本フィル 第2回」佐伯ふみ／#520「上原ひろみ〜ソロBlue Note Tokyo's 25th Anniversary Year Special Program」悠雅彦／#521「ポール・モチアン・トリビュート・コンサート」ステイヴ・バップ #522「第63回 藤井昭子〜地歌 Live」

#### MONTHLY EDITORIAL 今月の論点

- 01 悠々自適 / 悠雅彦  
Vol.54: 食べる記 XI
- 02 カデンツァ / 丘山万里子  
Vol.58: 「京都での朝の勤行」

#### HOTLINE JT

INTERNATIONAL >> | LOCAL >>

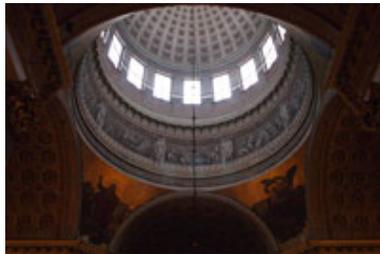
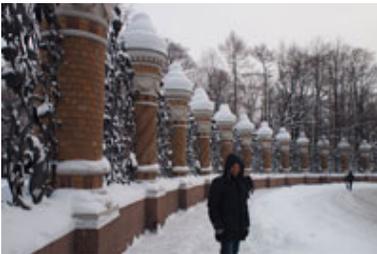
JAZZ TOKYO back number AFTER HOURS blog JAZZ TOKYO

amazon.co.jp twitter

Copyright (C) 2004-2013  
JAZZTOKYO.  
ALL RIGHTS RESERVED.



♪ サнкт・ペテルブルグにて



JAZZ TOKYO

GUEST COLUMN INDEX